# Veritas No.16 Autumn (2001.11.5)

目　次

「情報」をめぐる歴史学　　真栄平房昭

「情報リテラシー」という言葉　　井出敦子

広東外語外貿大学から　　田渕里奈

トロント大学図書館でのインターンシップを通して　　加藤祥子・岡村宏美

コレクション紹介ーオルチン文庫　　阪上澄子

無断転載を禁ず

## 「情報」をめぐる歴史学

真栄平　房昭　　（総合文化学科教授・図書館長）

歴史をさかのぼると、そもそも「情報」という用語が無かった江戸時代には、これを一般に「風説」と称した。風説の内容は、世の中に流布する「うわさ」や、海外で起こった革命的な大事件などに関する記録も含めて多岐にわたる。

幕末維新の激動は、さまざまな風説書の情報ネットワークによって全国各地に波及し、人びとの意識を変革し、時代を動かしていった。とくに政治情報の伝播は、「公論」世界を生み出す先駆けとなり、明治初期に発刊された「新聞」の社会的定着を可能にしたといわれる。また、長崎来航の唐船やオランダ船を通じて伝わった海外の情報は、「唐風説書」、「和蘭風説書」と呼ばれた。これらの風説書は長崎奉行所で翻訳されたのち、江戸の老中のもとへ速報された。幕府の支配層はフランス革命やナポレオン戦争、アヘン戦争といった海外情報を入手できたのである。さらに、幕府は長崎ルートだけでなく、ロシアに近い蝦夷地（北海道）の松前藩、朝鮮半島とゆかりの深い対馬藩、中国貿易のさかんな琉球など、複数の対外ルートを通じて積極的に海外の風説を入手することに努めた。こうして、幕府のもとに集積された海外情報の分厚い古記録が、いまも国立公文書館・内閣文庫に保存されている。

さて、現代に眼を向けると、多様なメディアが世界を飛び交い、パソコンや携帯電話が日本に普及してから二十年も経たないうちに、私たちの情報世界は「国境」を越えて急速に拡がった。インターネットのメリットはいうまでもなく大きい。しかし一方で、不要な商品の売り込み宣伝情報が洪水のごとく押し寄せ、匿名のネット犯罪も多発する。また、若者にとって手放せない道具となりつつある携帯電話や電子メールは、さまざまな利便性をもつが、メール確認なしには心がいつも落ち着かない「メール中毒」に陥る怖れもある。

今後ますます発達する情報化の波が子どもたちにどんな影響を及ぼすのか、それは人類の未来にとって幸福か否か、といった問題は、もちろん単純に予測できない。いずれにせよ、メディア社会の未来を見通すためには、過去の歴史を冷静に検証する作業が不可欠の前提となる。『現代日本メディア史の研究』（津金澤　聡廣ほか編、ミネルヴァ書房、１９９９年）による一例を挙げると、「新しい音の文化」として華々しく登場した「ラジオ」が人びとの社会意識や文化、芸能にどのような影響を与えたかを論じ、日本のラジオ放送が当初から国策メディアとして機能していた事実などを明らかにしている。

近い将来、パソコンや携帯電話による「情報革命」の歴史的意味についても、メディア史や社会学など多様な学問分野において検証されることはまちがいない。その時、私たちの時代をとりまく「情報化社会」の功罪と本質が見えてくるであろう。

＜参考文献＞

「情報の歴史」についてもっと詳しく知りたい方は、次の研究文献などを図書館で参照して下さい。

木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生ーかわら版と新聞錦絵の情報世界』(東京大学出版会)
岩下哲典・真栄平房昭編『近世日本の海外情報』(岩田書院)
岩下哲典『幕末日本の情報活動ー「開国」の情報史』(雄山閣出版)
保谷徹編『幕末維新論集 10 幕末維新と情報』(吉川弘文館)

## 「情報リテラシー」という言葉

井出敦子(図書館閲覧係)

最近しばしば遭遇するこの「情報リテラシー」という言葉、なんだかわかったようなわからないような、情報を使いこなす能力とでも言えばよいのでしょうか。この情報検索・収集・活用の能力、単に勉学・研究の場だけではなく急激に変貌を遂げていく情報化社会を生きていくためにも欠くことのできないものになろうとしているようです。

情報機器に依存した生活が原因と思われる記憶や思考の障害が各種メディアを通して様々に伝えられる中、私生活においては脳の活性化のために出来得る限り暗算に筆算、そして厚くて重い辞書のページを繰り手紙はペンを握って書くという手法への回帰を模索する一方で、情報提供サービスを職業とする者として日々自らの情報リテラシー向上に努めなくてはならないと考えています。

後期授業開始と同時に今年も担当の先生方のご依頼によって英文学科三回生対象のライブラリー・クラスを実施いたしました。今回からプロジェクターを使ってみなさんにパソコンの画面を実際に見ていただきながら説明をするという形にしてみました。機器のトラブルで申し訳ないことになってしまったクラスもあったのですが、失敗も含めたこの経験を活かしてよりよい図書館情報リテラシー教育を目指したいと思います。

先生方へ

授業の一環としてのライブラリー・クラスをご希望の場合は新館閲覧カウンターでお申し込みを随時受け付けておりますのでどうぞご利用下さい。

広州外国語学院（現在は広東外語外貿大学）、神戸女学院大学間の姉妹校提携（１９８７年）の後、１９９７年の新たな姉妹校提携を経て１４年がたちました。この間、私達の大学には沢山の先生方をお迎えすることができました。また、１９９８年夏からは本学の学生達が日本語教員養成課程の教育実習をさせていただいています。
今回は、１９９９年９月に広東外語外貿大学での日本語教育実習を経験された後、２０００年７月～１２月の同大学での語学留学を経て、２００１年２月から日本語教師をしていらっしゃいます田渕里奈さんに広州の街、人々の暮らし、大学の様子などについてのエッセイをお寄せ頂きました。

**広東外語外貿大学から**

田渕里奈　（広東外語外貿大学日本語教師）

　広東外語外貿大学は、英・日・仏・露・タイ・インドネシア・ベトナム・スペイン各言語学院と国際貿易学院によって構成されています。約３０人の外国籍教師がおり、日本語学科には私を含め３人の日本人教師が会話と作文の授業を担当しています。学生数は全校で８０００人、日本語学科には約４５０人が在籍しています。（１クラスは３０人前後）留学生部の学生はインドネシアやタイの華僑の子孫が最も多く、次に韓国、日本、ロシアそして、欧米やアフリカの学生と続きます。留学生部では標準語の『普通語』を勉強します。でも、広州の TV 番組や、大学の外では『広東語』（広東省や香港の方言）が話されていますので、ここで学ぶと、一度に二つの言語を習得することも可能かもしれません。

　広州の街についてお話する前に、ここでひとつ皆さんに質問です。
「みなさんの抱く中国のイメージはどんなものですか？」
広州のイメージというと、きっと、美しい山水画のモノトーンや、≪ウーロンチャ≫のＣＭなどのセピア色の雰囲気を想像されるのでは？ところが、広州は、亜熱帯性の高温多湿な気候で、原色の花が１年中見られ、近くの山に登れば、シダ植物や常緑樹がジャングルの雰囲気を十分に演出してくれる、そんな所なんです。そのため、ライチやバナナ、ドリアンやドラゴンフルーツといった南国のフルーツが楽しめます。どれも甘くおいしいですよ。それに、街なかにはフェニックスの並木、それにガジュマルがいたる所で大きく育っています。広州は沖縄よりも南に位置している、ということから想像してみてください。部屋の窓の外は、ある意味リゾート地の雰囲気です。
街では、おばあちゃん達がそのガジュマルの木陰にそれぞれの孫を連れてきてお喋りをしたり、おじいちゃん達の中国将棋を観戦したり…。両親がともに働く家庭がほとんどで、幼稚園もちゃんとあるのですが私の見るかぎり、孫の面倒は祖父母でという考えがありそうです。

こんな和やかさも広州の一面ですが、視線を上へ向けると外国の企業が入った超高層ビル群。人口は６８５万人。輸入に関しては香港と大陸を結び、大陸からの輸出においても中心の役割を果たす、商業都市の一面も見られます。実際、広州からの出港額は国内最高だそうで、ＧＮＰは３０００ドルを超えるそうです。日本の企業も多く、約３０００人のビジネスマンが駐在しているといいます。市内に点在する繁華街の店の敷地は３メートル四方ぐらいながら、品物は所せましと積み重ねられ、またはぶら下げられていて、じっくり見ないと何があるのかわからない、そんな店がずらずらと続く。そしてアーケードの下には洗濯物もずらずら…。さらに大通りから小路がいくつも伸びていて、それぞれ売っている品物が違い、探検気分で見て歩くには本当に楽しい。その上、路肩に広東省外から来た行商の人たちが、お店を広げていることも（でもこれは不法）。繁華街の描写として「混在」「混沌」「喧騒」などという言葉がありますが、それら全てを充ててもまだ余りある賑やかさです。

観光をメインに考えるなら、的士（タクシー）をチャーターすれば１日、２日でほとんどの名所旧跡、さらに博物館などもまわれるはずです。しかし、食がメインならそうはいきません。なにしろ３６５日、毎日違うものを食べつづけても広州の料理は食べきれないほど種類があるそうですから。さらにうれしいことに、日本でいう中華料理は、ほとんどが広東料理なので、みなさんにも親しみのあるもので食べやすいと思います。「飲茶（ヤムチャ）」の習慣もここが本場です。「飲茶」は早朝・昼食と夕食の間・夕食後（深夜まで）に用意されていて、お茶とオシャベリのお伴に点心をいただきます。その気になれば、≪１日６食≫にもチャレンジできますよ。

ここまでお話してきましたが、この３年の間に街の様子は幾度も変わり、まだまだ、これからも変化することは明らかです。現在も、どれも大規模な工事があちらこちらで進められています。

よく、中国の旅で心配されるお手洗い事情ですが、大学や広州の街で観光客を対象とする施設のトイレは水洗です。トイレットペーパー（持参）は流さないのがマナーで、ごみ箱に捨てます。地方の田舎ではまだまだだそうですが…。
そして、自動販売機は治安があまり良くないので街中では見かけません。先週、その自動販売機が何台か、構内に設置されました。中国だなぁと思ったのは、缶ジュースの他に、缶入りお粥と地ビールがあったこと…校舎内なのに。中国では酒・タバコに年齢制限が無いからいいのでしょうか。
もうひとつ、飲料水の事も取り上げられますが、蒸留水がペットボトルで買えるようになっていますし、宅配のサービスも流行っています。煮沸すれば安全だといわれていますが、水道水はある種の鉄分が多く、やはり体に良くないという調査結果もあるので飲みません。

広東外語外貿大学は郊外にあり、すぐそばには山があります。とだけ言うと、いい環境だと思われるでしょう？ところが、自然だけでなく国際空港もご近所なのです。飛行機の離発着のすさまじい音がするため、授業はたびたび中断されます。これは騒音公害。さらに、正門が面しているのは４車線の大きな道路の交差点です。これは大気汚染。残念ながら、女学院とはぜんぜんちがう環境ですね。
ただ、私の住む≪外国専家楼≫もある住宅街は、構内でも、その正門からかなり離れた（校舎からは歩いて 15 分）、山裾にあって緑も多く、空気も新鮮なので助かっています。実は、大学名が記載されていない地図の方が多いくらい市街から遠いところにあります。南国の自然に育まれ巨大化した(本当に大きい!)虫たちとは、付き合っていかなければなりませんが。蚊は岡田山のあの蚊より厄介です。猫みたいなネズミもいます。そして蛇も最近、通勤途中に見てしまいました。

校舎、運動場、学食、学生寮があるのは女学院と同じですし、他の日本の大学とも変わらないでしょう。でも全寮制であったり、ほとんどすべての教職員が構内で生活していたり、というのは日本人にとってはめずらしいこと。その人たちが構内で１日のほとんどを過ごすため、診療所から、郵便局、映画館（１本３元＝４５円）、商店街、レストランまで何でもあります。（付属の幼稚園、小学校、中高校〔６年〕も有）

ここで図書館のお話を。日本語学科にはクーラーのある図書室があります。教室や寮にはクーラーがまだ無いので、学生達にはありがたいスペースなのではないでしょうか。
蔵書としては、辞典や日本語学関係の参考書、雑誌、小説、≪ＯＯ新書≫の類などがあります。ただ、勉強机の数は１０人が使える程度なので研究をすることや、長い時間を図書室で過ごすということはできません。
研究となれば、教室からは少し離れた図書館へ行くことになるのですが、現在、ここは９月末から改修工事が始められており、１２月まで使うことはできません。貸し出しも中止されています。
日本語の蔵書は約２万冊(うち月間雑誌５０種／ひと月遅れで入る。閲覧のみ)で、日本関係の書籍の購入費として年間１０万元（＝約１５０万円）充てられているそうです。図書のコピーも１枚２角（＝３０銭）で受け付けている。新しい図書館にはコンピュータによる検索システムを導入する計画があり、２年後には完成させたいということです。（今は目録カード。中・英・仏語の文字入力はできるが、日・露語ではまだ）
図書館のトウ先生に以上のお話をうかがったのですが、日本関連の蔵書は広東省一の数を有しているという情報もいただきました。
日本語の図書がある、と学生が教えてくれた公共の図書館にも先日、行ってみましたが、残念ながら、紙が変色して茶色くなっているものばかりでした。文学よりも科学技術や農業技術の研究書が多い、という印象を受けました。これは目録の分類カードの量からの推察です。『日本関係の図書についてはパソコンによる検索の基礎もできていない』と図書館員の方がおっしゃったので引出しを全部引っ張って調査してみました。雑誌は２ヶ月前のものが最新でした。

こんなふうに私が街へ出るのは、くつろぎたくなった時か、日本食の材料を買出しに行く時ぐらいです。大学の近くにもコーヒー（のようなもの）を出してくれるお店はありますが、そのあたりでは日本語学科の学生に必ず会うので、≪教師モード≫に切り替えなきゃならない。教師という自分をしばし忘れて、本物のコーヒーを緊張せずに飲むために、はるばる（車で３、４０分）ホテルに行く私。日本ならどの街にもコーヒーが飲める喫茶店があるのに、広州では紅茶やコーヒーよりも、中国茶ということでしょうか。でも日本では今、中国茶がブームですよね。需要と供給のバランスで価格が決定されるということを、広州のコーヒーで実感しました。インスタントではない、挽いたコーヒーやリーフティーはここでは高いです。「贅沢」ということを、よく考えるようになりました。日本で言われている贅沢の基準とはズレがあるので難しいです。

学生の生活についても少し。原則的に全員寮に入って、６人か４人部屋で暮らしています。同じクラスの生徒とルームメイトでもあるわけです。部屋の片側には２段ベットが３台、反対側には机が６つあるシンプルな造りで、その他の設備としてはトイレ兼シャワールームがあるのみ。キッチンは無く外の給湯所に１日３回ポットを持って熱湯をもらいに行き、お茶とお風呂に使っている。『一人っ子』たちが共同生活をどのようにしているのか、興味があり聞いてみたところ、１日中いっしょにいるので兄弟姉妹の感覚になってくる、という答えでした。詳しいところはどうなんでしょう。ただ、見ていると学生同士の関係は密で共有物が多く、自分の物・人の物という区別をしていない様子です。日本人の感覚では踏み込めない相手の領域まで入り、同化しているようにも見えます。境が無いという点では、洗濯物を何でも気にせず公道に面したベランダに干している。各部屋、各階に干してあって壮観です。共学ですが、少数派の男子学生の目は、あまり気にしないという風で、これは気の毒というべきか…。

この大学で最も印象的なのは、学生が構内のいたる所でテキストを読んでいる光景です。ラジオからテープに録音したニュースを何度もなんども聞いて、それをリピートしながら歩いている子もいます。始業前からよる１０時の消灯まで学生はとても熱心です。

授業で気付いたことに、チョークがすぐ折れてしまうことがあります。そして黒板消しは布を何重にも巻いたもので消しにくく、粉も舞う。学生がノートを用意しないということも初めは疑問でした。日本では、小学校から教科書とノートはセットですよね。学生達は黒板の文字を直接テキストに、もちろん練習問題も書き込んでいます。それも、シャープペンシルではなくボールペンで書き、間違いは塗りつぶしています。資源の保護という点からすれば合理的ですし、ノートが無いわけではありません。消しゴムで消すと破れそうな紙なのが難点ですが…。
品質が良くて、同じ形のものや好みの色のものが欲しいなどなど、注文をつけると何も買えないのが広州です。そして欲しいものを見つけたら、「また今度考えてから」などと言って、後日その店を訪れても無い場合が多々あります。品揃えも一定ではありません。ある意味≪一点もの≫です。

広州という土地で生活することにより、私はカルチャーショックというものを知りました。はじめは、「異文化」を楽しめていたのですが、そのうち、価値観の違いが見えて「どうして？」と思ったり、納得できない事も多くなりました。食欲もなくなり、留学生時代は中国語の授業を午前中聞いて、どこへも行かず部屋で過ごしていた時期もありました。度々水道の水が茶色く濁り、月に何度も停電になる不便さや食事の作法が違うといった習慣が受け入れられませんでした。

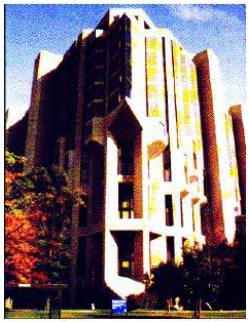
旅行でこの町に来て、数日で帰国していたらこのギャップが「おもしろかった」で済むことが、いざ暮らすとなるとそうはいかないものです。みなさんの中にも、海外または地元から離れた土地での生活で、こんな経験をお持ちの方は大勢いらっしゃるのでは？
今となっては、些細な事でいちいち「日本ではありえない」「日本ではこんなじゃない」と憤っていた自分が懐かしいと思えます。「違って当然だ」と適応できるようになって、精神的に楽になりました。

教育実習で中国に来ることがなければ、今でも留学や旅先に選ぶ国として欧米の方を考えているだろうと思います。
不安もありましたが、中国文化が誤解されていることも多々あると気付き、日本人が贅沢で、日本は「いたれりつくせりの社会」だといわれる理由もわかりました。広州はは２つの文化を見つめるいい機会を与えてくれました。帰国予定は、来年の７月ですがこれからも、毎日何が起こるかわからない広州を楽しみたいと思います。

## トロント大学図書館でのインターンシップを通して

加藤祥子（文学部英文学科３年）
岡村宏美（人間科学部人間科学科）

Robarts Library　私達は７月３１日から８月２３日までの３週間、「情報技術を先駆けて導入しているトロント大学図書館の今を知る」という主旨の元、トロント大学ロバーツ図書館でインターンシッププログラムに参加しました。インターンシップは本来「就労体験」を意味しますが、今回は仕事をすると共に、学びの時間も多く頂きました。図書館の一階はコンピュータで埋めつくされており、夏休みでも空きを待つ利用者で長蛇の列でした。「書物」という形での情報提供を主とする従来の「図書館像」とは全く違う世界が広がっていました。



毎日のプログラムとして、午前中は館内の各部署を訪れました。貴重書６００万冊を保管している Thomas Fisher Rare books Library では、実際に赤毛のアンの初版やシェークスピアの原稿を見せて頂き、感激しました。デジタル化を主に行う PREAERVATION DEPARTMENT では、貴重書のスキャン時に使用する大型デジタルカメラを見せて頂き、本の修復専門の方に「本を直す過程を知る為には実際に本を作ってみる事が一番だ」と実際にドイツ式の本を手作りさせて頂きました。また障害をもつ利用者のコンピュータ使用をサポートする Adaptive technology Resource Center スタッフの「利用者がコンピュータを自身で使えるようになる事で自信をつけ,QOL が向上することを常に念頭に置いています。」という声が印象的でした。

Mr.Toyonaga と一緒に

午後は毎日、日本語、中国語、韓国語で書かれた書物を収集している CHENG YU TUNG EAST ASIAN LIBRARY で、蔵書検索システム University Of Toronto Catalogue を使った蔵書チェック、また重複した書物の他大学図書館への搬送準備といった仕事をしました。その中で、スタッフの方々の利用者への心配り、教授や他大学図書館との強い繋がりからくる有用かつバラエティーに富んだ蔵書に触れる事が出来ました。

スタッフの方々は、現在も会議を開き、図書館をどう運営していくべきか、話し合いを重ねる発展段階にあります。ですが、一見それぞれ独立しているかのように思われたこれらの部署が、「今、いかに最高の状態で情報を利用者に提供できるか」という明確なヴィジョンによってまとまっていることを実感しました。そして、トロント大学が実践している図書館のあり方と、「直接出かけていって、情報収集をする場所」という私達の従来の「図書館像」との差に気づきました。

最後に、最大の関心事であった、「IT 導入による変化をどう感じるか」、という質問への皆さ

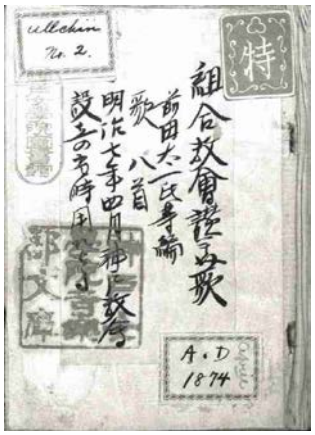
んの答えが心に残っています。長いキャリアを持ち、PC 導入以前のシステムに慣れ親しんでいても、膨大な時間を費やして作られたカードカタログが、オンラインカタログの出現によって一瞬にして塵となってしまっても、多くのスタッフは、IT の必然性を強調されました。生徒数約４万３千人という大規模な大学のメインライブラリーであるそのエネルギーと、新しい視点を頂いた三週間でした。

## コレクション紹介ーーオルチン文庫

阪上澄子（図書館閲覧係）

本学図書館本館に収蔵されているオルチン文庫（Allchin Collection)は、アメリカン・ボード派遣宣教師ジョージ　オルチン師（Rev. George Allchin）によって収集され 1931 年本学に寄贈された。明治初期の日本の讃美歌集を中心に、オルチン師の論文・各教派使用讃美歌・教派連合使用讃美歌集等の 115 点からなる。1978 年に本学院創立 100 周年記念事業として、これらの中から初期のもの 12 集が選ばれ、『覆刻　明治初期讃美歌』（新教出版社）として復刻された。また 1991 年には、全ての歌に楽譜がついたものとして初めての『讃美歌并樂譜』（1882 年）が新教出版社より復刻されている。

『無題』1874(明治７)年



組合教会最初の讃美歌集

George Allchin

1852 年イギリス生れ。1872 年カナダに、5 年後アメリカに移る。1882 年、宣教師として来日。伝道に従事する一方で、日本における讃美歌を研究し、「組合教会」と「一致教会」との合同の讃美歌集『新撰讃美歌 譜付』(1890，明治 23)を編纂・発行した。

1907(明治 40)～1918(大正 7)年の間、神戸女学院理事を務める。1919 年任務を終え帰国したが、 1931 年の 4 度目の来日の折り、神戸女学院の西宮への移転に際し、キャンパス内の造園などに協力した。オルチン師の名は、デフォレスト館より下る木立の中の細い小径の「オルチン・ロード」に、また、本学院創立 100 周年記念に建設された「ジョージ・オルチン記念音楽館」に、このオルチン文庫と共に神戸女学院に残されている。